

大学におけるカルト対策―現状と課題

川島 堅二

(恵泉女学園大学・教授 全国カルト対策大学ネットワーク・発起人)

1. カルトとは

カルトの語源はラテン語の *cultus*、すなわち宗教的な「崇拜」行為一般を意味する言葉である。それが今日使われるような反社会的な宗教団体を指す言葉となったのは、七〇年代から九〇年代にかけて主にアメリカにおいて起こった常軌を逸した宗教集団絡みの事件による。すなわち、人民寺院（一九七八年・信者の集団自殺）、ブランチ・ダビデアン（一九九三年・籠城と銃撃戦）、ヘヴンズゲート（一九九七年・信者の集団自殺）などをカルトと呼ぶようになったのである。日本でも一九七〇年代以降の統一協会

の霊感商法や一九九五年のオウム真理教の地下鉄サリン事件、最近では二〇〇六年に報道された摂理教祖によるセクハラ事件に関連してカルトという言葉が一般に用いられるようになった。

しかしながら「カルト映画」（広辞苑）という用法が示しているように、この言葉は、憲法で保障された「宗教の自由」「表現の自由」の範囲内で法的な規制や対策の対象外とされる文化現象をも意味する使われ方もしている。したがって大学におけるカルト対策という時、その具体的対象（反社会的宗教集団）を明示することが重要になってくる。対策理由も、カルトだからというのではなく、反社会

性の事実を具体的に指摘することが肝要である。

また、一口にカルト対策といっても、立場の全く異なる二つの流れがあることも知っておかねばならない。すなわち、一つは主に保守的なキリスト教福音派による対抗カルト運動である。この立場が問題にするのは伝統的なキリスト教の教義である三位一体を採用していないなど教義における逸脱である。大学におけるカルト対策では、このような立場は問題にならない。もう一つが非宗教的反カルト運動であり、日本では日本脱カルト協会、世界的には国際カルト研究会 I C S A (International Cultic Studies Association) が担い手となつてくる運動である。ここでは問題になるのは人権侵害、思想統制(マインドコントロール・洗脳)であり、大学生をターゲットにしたカルトの活動が問題となるのも、この点においてに他ならない。大学におけるカルト対策を進めるにあたり、時には学外の専門家に助力を求める場面も出てくるが、その人がどのような立場でカルト対策に取り組んでいるかを見極めることも重要である。

2. 入信の背景と問題点

カルトの被害は大学生などの若者にとどまらない。靈感

商法の被害は財産のある中高年である場合が多い。しかし、他方、カルトはすべて自らの教義を世に広め、信者を増やしていくという共通の課題をもっており、この布教勧誘活動の担い手として大学生が格好のターゲットとされるのである。では、大学生はどのようにしてカルトに入信していくのだろうか。また、そこにはどのような問題点があるのだろうか。

(1) 巧みな情報操作(マインドコントロール)

「マインドコントロール」というと何か特殊な技法のように思ふかもしれないが、そうではなく、巧みな情報操作のことである。具体的には最初の勧誘時、決して宗教を前面に出さず、大学生であれば誰もが関心を示すようなイベント、サークル、芸術活動を装って接近することである。一昔前は、宗教や哲学、人生論に関心がある大学生といえ、まじめそうだがどこか野暮つたい垢抜けしない雰囲気のある学生が多かった。しかし、カルトのメンバーはそうではない。彼らの本音は布教なのだが、そんなことはおくびにも出さない。「サッカークラブです」「芸術祭です」「ゴスペルのグループです」と言つて近づいてくる。服装も垢抜けしている。毎日同じ服を着ないよう指導され、団体によっては、声のかけ方、お辞儀の仕方なども指導する。また、ナ

ンパと勘違いされないように、声かけは異性ではなく同性に行うように指導される。

宗教団体であることを明示している場合でも、過去において組織的犯罪が摘発された団体であることは巧みに隠されている。アレフはオウム真理教の後継団体であるが、その公式ホームページにはオウムとの関連は一切触れられていない。摂理は「キリスト教福音宣教会」なる公式ホームページを最近立ち上げ、その中で教祖を実名で紹介しているが、その教祖が強姦致傷罪等で現在懲役一〇年の服役中であることなどは一切隠されている。

このような正体を隠した勧誘に対しては二〇〇一年六月二九日札幌地裁判決において「伝道の方法としては許容し難い不正な方法」という司法の判断が下されている。宗教の選択は、人の一生をその死後まで左右する重大事である。何事においても説明責任が問われる時代だが、宗教もまた例外であってはならないということである。

(2) 階層的組織と整った教え込みプログラム

以上のような情報操作と連動しているのが、上下関係が明確な階層的組織構造である。当初、勧誘を受けた学生はスポーツサークルや文化サークルに入会したという軽い気持ちで活動に関わる。仲間、親切だし、話をよく聞いて

くれ、時には、手料理でもてなしてくれる。とても得をした気持ちになる。しかし、徐々に、自分がお客さん扱いで、打ち明けられていない別の活動があるらしいということが分かってくる。自分の知らない時、知らない場所で他の人は集まったり、連絡を取り合ったりしているのが雰囲気を感じ取れる。そうした思いが高まった頃合を見計らって、ある時、「実は、僕たちは海外にいる偉い先生の教えと一緒に学んでいるのだけれど・・・どうだろう、君も学んでみない。きっと人生の役にも立つよ」などと打ち明けられる。こうして、教義の教え込みに移っていく。しかし、誘われた人すべてが、このように打ち明けられるわけではない。同じ時期に入会しても打ち明けられない人もいる。打ち明けられた人は、自分が、特別に選ばれたような優越感を持たされ、以前よりも団体内でのステータスが一つ上がったような思いになる。教え込みを受けるうちに、色々な疑問も湧いてくる。丁寧に教えてはくれるのだが、団体の核心に関わるような質問は、「今は、分からないだろうけれど、もう少し学んだらきっとわかるよ」とはぐらかされ、さらに奥の教えがあるかのように印象付けられ好奇心を持続させる仕組みである。こうして一定のプログラムを修了すると、正規のメンバーとなり、スポーツや文化サークルだけ

ではなく、礼拝といった宗教儀式にも参加するようになる。また、勧誘活動や初学者の教え込みに補助として参加するようになる。こうして、当初は週一回、日曜の午後だけのサークル活動が、サークルと教義の学びという週二〜三回の関わりに、そして、次の段階では、日曜の午前と水曜の夜の礼拝がそれに加わるというように、徐々に時間が増えていく。気がついたときには、授業とアルバイト以外のすべての時間をカルトの活動に充てているという事態になっている。

こうした徐々に好奇心を刺激され関わりを深め、それに伴ってステータスも上昇していくという幻想を与える仕組みは、大学生、特に小中学生の頃から厳しい受験勉強を耐え抜いて念願の大学に合格した優等生の心に非常にうまくフィットする。少子化に伴い、最近ではどの大学でも学生の勉強や生活のサポート体制を充実させているが、それでも、高校までに比べれば、大学ははるかに選択肢が多く、学生はまじめであればあるほど相当に苦労して自分の課題を自分で見出さねばならない。しかも、多くの場合、どんなにその課題に熱心に取り組んだとしても、これまでのように順位や偏差値という数値に直接反映するわけでもない。また第一志望の大学であっても、入学前の期待が応え

られるとは限らない。第二志望以下の大学であればなおさらである。そんな心の隙間に、カルトの提供するプログラムが入り込む。ここでは、熱心に活動して関わりを深めればそれに応じて課題が与えられ、それをこなせば目に見えてステータスが上がっていくという受験時と同じような手応えのある生活が用意されている。

(3) 性の管理

性の管理もカルトに共通の特徴である。多数の若い独身男女が集まっているサークルであれば、恋愛関係が生じるのは自然であるが、自由恋愛、特に婚前交渉は「墮落」「罪」として明確に禁じられる。入信以前に、そうした関係のある人は、はっきりと別れるように指導される。それが嫌な人は、教え込みの段階でカルトを去るし、そうした理由で去った人をカルト側も引きとめはしない。そのような人は「滅びの世界」に落ちてしまった人と見なされる。入信後も、相手が信者であっても、個人的付き合いは厳しく規制される。婚約から結婚にいたるプロセスは、厳密な手続きを経て行われ、それらの時期を当人同士で自由に決めることはできない。

このような仕組みに、現代の大学生がはまっていくのは意外と思われるかもしれない。しかし、ここにも現代の大

学生ならではの落とし穴がある。大学生時代に性的経験を
持つ人は相当数いる。どのゼミあるいはサークルに所属す
るか、卒業後の進路をどうするかといった問題が、大学生
が入学後迫られる表の選択肢とするなら、いつ、どこで、
誰と、性的経験を持つか、あるいは持たないかは裏面の、
表に劣らず深刻な選択肢である。結婚までセックスは控え
るべきという倫理観を持つ学生もいないわけではないが、
少数というのが実感である。「欲望の赴くままに誰とでも」
という極端な学生も少ないだろうが、「結婚を前提とした
性関係しか認めない」というのも少数意見である。大部分
は、「愛」があれば、「本当に好きな人」であれば関係を持
つてもかまわないということではないか。しかし、ここ
に大きな落とし穴がある。何が「愛」なのか、「本当に好き
」とはどういうことか、誰も確かなことを教えてくれない。
一昔前の世代であれば、このような問いの答えをもとめて
文学や哲学の世界に踏み込んだかもしれない。もちろん今
でも、そのような学生たちはいる。しかし、今は、親その
他第三者の目の届かないところで携帯電話やメールなどに
より二人だけのコミュニケーションを結び、また二人だけ
で過ごすことのできる個室環境を容易に手に入れることの
できる時代である。「愛」とは何か、「本当に好き」とはど

ういうことを、ただ精神的、観念的に考えるだけではな
く、実際に性的関係に踏み込んで悩み、考えるというのが
現実である。

このような状況は、大学生に相当な重荷、ストレスをも
たらしている。女性であれば妊娠の不安、そして、男女を
問わずエイズなどの性感染症の不安は相当なものである。
あるカルトでは、婚前交渉を懺悔すべき罪として、入信時
に告白することを求めるが、ある人の告白に「興味本位に
セックスをしたが少しも楽しくなかった。それどころか、
性病が怖くてしかたがなかった」とあった。また、自分は
「本当に好き」と思って体を許しても、相手は必ずしも真
剣ではなく二股をかけられていたという衝撃。自由恋愛に
踏み込めば、こうしたリスク、ストレスを負わなければな
らない。

性を徹底的に管理するカルトのメンバーになると、この
ような「重荷」から「解放」される。実は問題を先送りし
ただけなので、本当の意味での解放ではないのだが、少な
くとも、当座は悩まないで済むようになる。あるカルトを
脱会した女性が、語った言葉を印象的に思い起こす。「先生、
信じられますか。メンバーの男女六名だけで海外旅行した
のですが、その期間中、一度も恋愛的な問題で悩むことが

なかつたんですよ」。

ただここでも問題なのは性の管理自体ではなく、そういう管理をしている団体であることが、入信の段階では隠されていることである。大学のサークルでも公式戦の上位入賞を目指す本格的な団体の中には部員同士の恋愛を禁じるところもある。しかし、そのことは入部の段階で明示され、学生はそれを承知で入部するのである。カルトの場合は、そういう団体であると知るのは入信の儀式等を済ませ、心理的に後戻りできなくなつてからである。十分な説明責任が果たされていないという問題がここでも明らかである。

3. 対策と課題

以上のように、カルト勧誘の本質は正体隠しという情報操作であるから、これに対する最も有効な対策は正確な情報提供である。学内で種々の文化・スポーツサークルを装ったカルト勧誘が行われていること、こうした勧誘活動を行っている団体の反社会性について、入学時のオリエンテーションで周知することは、すでに多くの大学で行われている。最近では一年生の必修科目で、外部から専門家を招いてカルト予防講義を行う大学も出てきているが大変効果的であると思う。また、勧誘時には公式サークルであるこ

とを明示する腕章を身に付けさせるなど、管理を徹底することなどが有効である。

多くのカルトが複数の大学で活動していることから、カルトに関する情報交換が大学間においてなされること、有効との認識から、昨年三月、弁護士やカルト研究の専門家が発起人となつて全国カルト対策大学ネットワーク (http://religion.web.infoseek.co.jp/religion/univ_cult_jp/) が立ち上げられた。当初、首都圏の約四〇大学から始まったが、一年半を経た現在、加盟大学は一〇〇を超えた。脱会者から得られたカルトの最新情報が、大学の学生部の職員などに直接届けられる画期的な仕組みであり、加盟大学が増えていくことが今後の課題として望まれる。

さらに、最近では大学の学生部が学外の専門家やカルト被害救済団体と連携して、入信してしまった学生の救出に取り組む事例も少数だが現れてきた。これは大学と学外団体、そして何よりも被害学生の保護者（多くの場合は親）との密接な連携が不可欠であり、今後、そのノウハウが様々な場で議論される必要のある課題であらう。

4. おわりに

昨年六月、東京拘置所でオウム真理教地下鉄サリン事件

の実行犯の一人、広瀬健一死刑囚と面談した。一〇分間ほどの短い時間であったが、「毎日何をされているのですか」という筆者の問いに対し、広瀬死刑囚は「塾の下請けで数学の問題を作っている。わずかでも収入を得てサリン事件の被害者の賠償に充てたいから」と答えられた。彼は、自分が犯してしまった過ちが二度と繰り返されないように、自分のオウム入信の過程を克明に分析した手記「学生の皆様へ」も公開している。彼ほどの明晰な頭脳をもった人を無差別大量殺人犯に変貌させてしまったカルトの恐怖、筆者がカルト問題に関わる原点である。多くの前途ある若者を預かる私たちは、この事件を決して風化させることなく、対策に全力を尽くさねばならない。

学生の皆さまへ

「生きた意味は何か」と皆さまへ、あの質問の私が始めた理由は、それが皆さまの年ごころの人だを抱きかかす問題でも、また若者がカルトに係わる契機ともなるのではないか。

オウム真理教による事件以降も、「カルト」に対する警戒の呼びかけにもかわらず、その被害が絶たないようです。そのために「カルト」に関する講座が各校に開設されたのに入念と防止するための小紙と皆さま宛に書くようお願いがありました。それを引き受けさせていた皆さまへ、それが私の責務と思われたのです。

私は地下鉄サリン事件の実行犯として、被害関係者の皆さまと筆舌に尽くし難い惨害にわれわれでいらい、今もこの心の中、深く深く思ひ、謝罪の言葉も見つかりません。また社会の皆さまにも多大な迷惑をおかけ致しました。その贖罪は、私がおこなう刑に服せうとの、あなごの存しては、いかにせめて、あなごの悲惨な事件の再発と防止のため、一助になることを願い、私の経験と述べさせていただましく思います。

図：広瀬健一死刑囚の手記「学生の皆様へ」